

ちの遊びの活性化には、彼らをめぐる地域の人々のかかわり方の重要性に改めて注目させられるのである。

(7)苦言をつけ加えておくと、第1章の誤植はあまりに多すぎる。特に、26頁の表の横軸のスケールの間違いや59頁の余分な文章の混入からすると、校正をおこ

書 評

なっていないのではないかと疑われる。大きな構えの玄関に緊張してはいったところ、乱雑に脱ぎとばされた履物をみたようで印象がよくない。

◆A5判 533頁, 10,094円
多賀出版

長尾彰夫・池田寛 編

『学校文化—深層へのパースペクティブ』

お茶の水女子大学 耳塚寛明

1

欧米の最新研究を紹介し、あるいはそれらを理論的に読み解こうとする試みを超えて、その日本的理論展開や日本社会への実証的適用を図ろうとする研究は、『教育社会学研究』誌に現れた投稿論文を並べてみるまでもなく、けっして多くはない。他方で、教育社会学的研究の最前線でもっとも頻繁に用いられるキーワードは「文化的再生産」だといってよい現状がある。ブルデューやバーンスティンが登場しない「教育社会学概論」は時代遅れの欠陥品とみなされる。いったい、この概念装置の流行とわが国の文脈に即した研究の展開とのギャップを、どう考えたらよいのだろうか。

この本は、「学校文化」の視角から、日本社会における不平等の生成や階級(階層)社会の再生産問題に対して、欧米での理論紹介をこえた貢献をなす可能性を秘めた、貴重かつ意欲的な論文集である。本書におさめられた11篇の論文の

すべてに、文化的再生産の視角が必ずしも明確に貫徹されているわけではない。だがここでは、本書をあえてそう読みたい。

こうした読み方は、大阪の若手研究者を中心とする執筆者グループの意図からそう離れたものではないだろう。第1章に「社会構造の再生産のプロセスを学校における文化伝達のメカニズムに着目して明らかにしようとする」(40頁)学校文化論のパースペクティブを提起する章が配置され、第10章(終章)に「学校文化論の課題—文化的再生産論を超えて」と題された章があることから、それが知られる。

2

第1章は、本書の実質的な理論枠組みを提示したイントロとして位置づけることができる。まず、従来わが国における「学校文化」概念を機能主義的かつ要素主義的だと批判し、文化を「もろもろのカテゴリーや人間の行動に対する規則

からなるもの」と定義することの有効性を示唆する。次いでアメリカおよびヨーロッパにおける学校文化に関わる諸論をレビューし、学校を偉大なる平等化装置としてみるがごとき楽観論ではなく、教育が社会構造の再生産に寄与している側面に関心を集中していること、教育による再生産のプロセスを、文化的側面に着目して明らかにしようとしている点に、公約数を見ることができるとする。レビューは秀逸で、ポウルズ&ギンタス、アップル、バーンステイン、ブルデュー、ウィリスなどそうそうたる研究が、たくみに単純化されている。教育社会学概論のノートとして使いたくなるほどである。

総じて従来のわが国の学校文化論は、こうした欧米での学校文化研究が研究者自身の文化的なバイアスに脱色されて、断片的に御都合主義的に紹介されるにとどまっていた。そこからわが国の研究は次のような課題をもつという。第一に学校文化を社会階級、あるいは社会集団間の不平等の文脈で論じること。第二に、学校文化を学校という近代的制度が普遍的にもっている特徴と、わが国固有の文化が混ざりあったものとして理解すること。それゆえ、ブルデュー理論をそのままわが国に適用することは的外れであると同時に、それを異国の理論だとして無視することも愚かなことである。

続く2章から9章は、本書全体からみれば各論に相当する。文化的再生産過程における学校の役割を考える上で重要な局面は、階層・階級的の不平等、人種・民族的の不平等、性による不平等、都市一地

方間の不平等などだが、内容的ばらつきが目立つものの、領域的にはそれらがほぼカバーされている。

学校文化の国際的普遍性と日本の特殊性(2章)、学校という組織的文脈における生徒文化の特性(3章)は、いずれも学校文化それ自体を直接対象とした考察である。

5章から9章は不平等の各相に焦点づけた分析で、家族・階層(5章)、地域・被差別部落(6章、9章)、ジェンダー(7章)などが各々独自の問題設定をもって取り上げられている。各章を逐一紹介する余裕はないが、評者の私的関心からいって、とくに漁村部落での参与観察的方法(6章、事実の提示に参与観察の利点が十分生かされていない、一部解釈がやや性急などの疑問がある)と、ジェンダーと学校文化(7章)に関心をもった。後者はジェンダーのみならず階層的再生産を視角に含んでおり、またセクシズムと平等原理というあい矛盾するメッセージの中におかれた女性の主観的世界を描こうとする。ジェンダーは現在もっとも注目される研究領域のひとつだが、そのわりにわが国の教育社会学的研究の成果は乏しい。ぜひ本格的実証研究へと発展させてほしいと思う。

最終章(第10章)は、いわば本書全体の作業の(中間)まとめに相当する。ここでは文化装置としての学校を理解する上でもっとも重要なのが、4つの次元からなる正統化論であり、とりわけ学校による「信念体系の形成」の重要性が指摘されている。階層化や能力主義的な評価を生徒、人々が受容する過程がなけれ

ば、学校の存続はおぼつかない。人々が能力主義的な評価を受け入れ、それに伴う階層化を認めるメカニズムを明らかにするのが、この信念体系の形成問題である。具体的には、試論的だと断った上で、次のような信念形成の検討が必要だとしている。メリトクラシー神話（「能力」こそが身分や階級の壁をこえる普遍的基準だと考える）、科学的世界観（学校知に浸透している、合理主義的科学観の批判的分析。それは階層社会を予定調和的な世界であると無批判的に受容する態度をうみだす可能性をもつ）等。研究の具体的プログラムまでは与えられていないものの、正統化メカニズムを解明する上でのヒントが提示されている。ただし欲をいえば、この正統化の観点と能力あるいは科学的世界観については、2章から9章までの各章において、すでに分析に用いられるべき観点ではなかったか。ブルデューの理論じたい、「能力による選別」という一見業績主義的正統性をもったものに対する疑義の提出であったのだから。

3

上記各章には、第1章を除いて、「文化的再生産論のパラダイムを視野に入れながら、学校教育変革の突破口」（219頁）を探るといふ熱い意気込みが、具体的記述をともなって溢れている。目次をのぞいてみても「学校文化創造の可能性」「新しい学校文化の創造」「共感と変革の学校文化」といった項が並ぶ。この現状改革的・実際のスタンス自身、本書のひとつの特徴といってよい。変革の企て自体けっして否定しようというのでは

ないが、しかし中には森重雄氏のいう「教育の社会学モデルの教育学モデルへの従属」（『教社研究』47集、社会学的モデルや観測データの含意に対しては反事実的ではあるが、教育学からは支持されるだろう記述）と読める部分がないわけではない。ここでは、まずは社会学的モデルにそった説明を行うという立場から、細かな点はさておき、課題をいくつか指摘しておきたい。

第一に、執筆者も指摘していることだが、文化的再生産論の適用に際して日本の文脈を強調する必要性である。このことは日本に不平等問題が存在しないということをお願いしたいのではない。SSM調査ほかが明示するように、日本社会は急速に高学歴化したにもかかわらず、学歴達成は親の属性的地位に拘束され続け、階層的再生産の傾向を持続してきた。さらにいわゆる近代セクターに属する人々の増加は、教育を通じて自らの地位を子弟に伝達しようとする人々の増加を意味する。この意味で文化の不平等をとおした再生産論の有効性はわが国にも該当すると考えられる。問題は、こうした普遍性ととともに、とりわけ特殊性を具体的に把握することの重要性である。

第二に、これと関わって、階級をどう理論的に構築するかという問題がある。本書では、わが国ではたしかにバーンステインのいう労働者階級文化やブルデューのいう支配階級は明示的ではないものの、しかし被差別部落などのマイノリティ・グループ、女性などが厳然と存在し、それは文化的再生産論が説明すべき対象であるとの立場がとられている。そ

れはもちろん否定されるべきではない。だが、SSM調査が主要に描いているのは、このようなマイノリティとマジョリティとの間の社会関係の再生産の姿だけではないはずだ。再生産されるのは相対的な階級的地位関係であるにせよ、経済資本や文化資本という観点からみて等質な階級を「わが国の」文脈において理証的に構築する作業は残る。これらはいずれもつきなみな指摘かもしれないが、今後の作業にとって避けることはできない。

第三に、学校内部における選別過程を直接の対象とした研究の欠落である。学校は「マクスウェルの悪魔」(ブルデュー)のごとく、相続した文化資本の保有者を非保有者から区別する選別の場である。それは同時に、本来合理的ではない(うさんくさい)はずの選別を合理的に正統化する過程でもある。ここでは最終

章で提起された、メリトクラシー神話、科学的世界観を形成する正統化メカニズムや学校的能力を同定することはもちろん、教師=生徒関係など学校の内部過程の分析が主要な課題となる。すでに分析に十分な概念装置を備えた執筆者グループによる次著に期待すると同時に、評者ら自身の課題としたい。そのとき、これまでわが国でなされてきた教育選抜に関する学校内部過程研究の諸知見を、本書に示された視角から再料理できるのではないか。

あふれかえる a-theoretical な学校社会学「的」実証研究に陥ることなく、かつ欧米での理論紹介を超えた貢献を生み出す、第一歩が本書に示されたように思う。

◆ B 6 判 245頁, 2,575円
東信堂